# 15日から新聞週間スタート（～21日）

# あの日の色再現

写真には見る人の心を奮わせ、時に世の中を変える力がある。歴史を切り取る新聞紙面の写真は、活字と同じく報道に欠かせない。15～21日の新聞週間に合わせ、北日本新聞社が東京大大学院の渡邉英徳教授の協力を得て、カラー化したモノクロ写真は8枚。いずれも人工知能（AI）技術と、本紙記者の足をかけた取材活動によって完成した。空襲で焼け野原になった町並み、各地を襲った自然災害、スポーツ大会での県勢の活躍がもたらした興奮と歓喜。〝あの日の富山〟が今、色鮮やかによみがえった。

【本記1面】

富山大空襲で焼け野原になった富山市街地（西町方面を撮影）＝1945年8月

太平洋戦争の終戦間際だった1945（昭和20）年8月2日の午前0時36分に富山大空襲が始まった。米軍のB29爆撃機約170機が同2時27分までの間に50万発以上の焼夷弾を富山市中心部に投下した。市街地の99・5％に当たる1377㌶が焼き尽くされ、2万4914世帯が被災。確認されただけで2720人が亡くなった。本土空襲の中でも特に甚大な被害として知られる。市街地で焼け残ったのは鉄筋コンクリート造りの県庁や電気ビル、旧富山大和などごくわずかな建物だけだった。

## 歴史と向き合い未来に記録

郷土史を研究する

**須山盛彰さん**（84）富山市呉羽町

空襲の時は10歳だった。富山市呉羽町の自宅近くから真っ赤に染まる街の上空を見て、本当に恐ろしかった。数日後、国民学校の同級生と市街地へ行き、朝から夕までがれきの片付けを手伝った。量が多く、作業がなかなか進まなかったのを覚えている。これまで、戦時中の富山における学童疎開の研究を長年続けてきた。歴史と向き合い、未来に記録を残すために、今後も研究を続けていきたい。

## 火がくすぶり熱かった

11歳で空襲に遭った

**中村隆さん**（85）富山市五福末広町

富山市奥田地区の自宅で空襲に遭った。家族5人で家の庭の小さな防空壕に飛び込み、何とか助かったが、家財道具はほとんど燃えてしまった。8月2日の昼、市街地を通って親戚がいる同市堀川方面に向かった。写真に写っている辺りは、がれきにまだ火がくすぶっていて、道路ははだしで歩くとやけどしそうなくらい熱かった。雨が降らない日が続き、暑さと疲れでつらい毎日を過ごした。

## AIで写真カラー化

現在

富山市荒町から撮影した現在の西町方面
＝2019年10月

## 新聞週間特集

16、17面 鮮やかに記憶つなぐ
「米騒動」「富山産業大博覧会」「しんきろう旋風」「富山国体」「三八豪雪」「富山空港開港」「イタイイタイ病勝訴」
18面 愛のひと声運動 280人が見守り